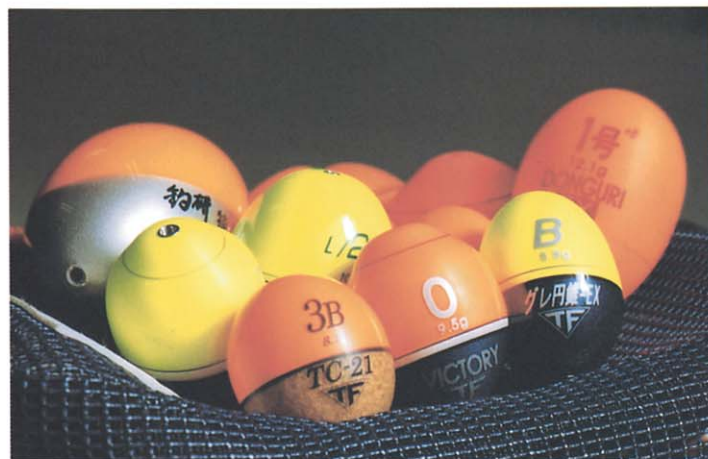


国東半島ウキ釣り日記

ライター、漫画原作者 毛利 甚八



福岡県遠賀郡遠賀町にある釣研の社屋。社員数107人、年商13億円である。



釣研の中通しウキの数々厳密な浮力の調整がしてあり、食い渋る魚に違和感を与えずに餌を食わせる。



塗装前の中通しウキ。下部に真鍮の錘が組み込んである。



二〇〇一年の夏から約四カ月の間、僕は国東半島で釣りばかりして暮らしていた。

御存知のとおり国東は九州の北東部に突き出た丸いコブのような半島だ。目の前の海は瀬戸内海である。北に関門海峡、南に豊予海峡が控える豊かな海である。

ところが東京から住まいを移してからしばらくの間、僕はこの海を誤解していた。

「海が汚く濁っていて、遠浅の海岸ばかりで釣りにならない」

そう考えていた。

対馬、五島列島、吐喝喇列島などの海を見たことがあったから、なおさらだった。僕はそのような

旅先の海で、溪流竿に小さなサビキ仕掛けや鉤とオモリだけのブランクリと呼ばれる仕掛けを使い、釣りをしてきた。インタビュウや写真撮影といった仕事の合間に、現地で道具を買い揃え、アジやカサゴといった小さな魚の引きを楽しむ。それはそれで楽しいのである。

そんな経験から「釣りは努力するものではない、魚のいる海で糸を垂れることがすべてである」という思い込みを育てた。だからこそ、浅くてどんよりと濁った国東半島の海に、強い魅力を感じなかったわけだ。

国東半島に引越してから五カ月ほど過ぎたある夏の夜、若い友

人から電話がかかってきた。港で釣りをしているから、ちょっと来てみませんかという誘いだっただ。

そこは豊後高田市の桂川という川の河口に築かれたちっぽけな岸壁だった。潮の満ち干によって水を満々と湛えたり干上がったたりする、川とも海ともつかない場所である。友人は中通しのオモリにハリスと釣り鉤という単純な投げ釣りの仕掛けを二つ投げ込み、ピート張りの地面に寝かせてあるだけ。「こんなところで魚が釣れるの？」

僕は驚いてそう尋ねた。

「チリン」

と竿先につけた鈴が鳴った。

セイゴ（スズキの仔魚）が上がってきた。

また「チリン」と鳴るとチンゴ（クロダイの仔魚）である。

ぽつりぽつりと鈴が鳴り、その度に河口から魚が上がってきた。

この一見くたびれきったように見えるドンヨリと濁った海が、実に多くの魚たちを育てていることを、その時、初めて知った。

僕は、友人が次々に魚を釣り上げるのをボンヤリと眺め、数日後には竿とリールを買いに出かけた。そして、なぜか友人の流儀にはしたがわず、ウキ釣りを始めてしまったのである。

そしてニューヨークの自爆テロ



国東半島の海岸線は遠浅の地形が多い。国東半島で遊ぶうちに稚魚・仔魚のユリカゴとなっている瀬戸内海の豊かさに気づいた。日本漁業の将来のためにも保全が急がれる。



玄関に飾ってある釣研社長が釣ったカッポレの魚拓。

キの中型魚)が走り回る。真つ暗な海面に浮かぶ電気ウキがしゃぼりしゃぼりとメイタ(クロダイの若魚)になめられた後、赤く滲みながら沈んで行く。明け方のわずかな時間の潮止まりに投げ込んだ第一投にマゴチが食いつき、オレンジ色の円錐0号ウキをひきずり回したこともある。その

ひとつひとつが、僕がかつて経験したことのないほど濃密な、遊びと黙考の時間であった。そして二月の半ばを過ぎた頃、低水温を嫌う魚たちは深場へ去っていった。春になって魚たちが遠浅の海に戻ってくるまで、僕はウキのカタログを眺めながら、ストーブにあたり、焼酎のお湯割りをすすって過ごすのさ。今、僕の目の前にあるのは「釣研」という九州の片隅にある世界一のウキメーカーのカタログだ。年間のウキ生産数は200万個。種類はなんと192品種もある。主力はチヌ(クロダイ)やグレ(メジナ)を釣る中通しの円錐ウキだ。中通しの円錐ウキを大雑把に説明するとすれば、卵型に削った木の中心に道糸を通す孔を開け、底にオモリを付けたものだ。主なオモリは真鍮である。真鍮を使う理由は鉛に比べて野鳥などの野生動物に悪影響を与える可能性が低いからだ。また旋盤などの加工がしやすい。真鍮の使用量は、年間八トンに及ぶという。釣具屋にでかければ、釣研のウキがずらりと並べてあるのを眺めることもできるが、スペックや対象魚を詳細に解説したカタログを読む快感はまた格別である。一九八〇年にわずか五人で創業

の報道を境に、釣りに行く頻度が格段に増えた。あのように重大な出来事を、不用意に言葉に置き換えてはいけない。主催するホームページも更新せず、インターネットで語られる事件に対する嘆きにも反応しなかった。ただただ海に出かけ、アオイソメに釣り鉤を突き立て、水面に漂うウキをみつめ、夕焼けや朝焼けに燃える空を仰いで過ごした。

うだるような真つ昼間の埠頭の海に、ほっそりとした棒ウキがいさなり消し込まれてフッコ(スズキの中型魚)が走り回る。真つ暗な海面に浮かぶ電気ウキがしゃぼりしゃぼりとメイタ(クロダイの若魚)になめられた後、赤く滲みながら沈んで行く。明け方のわずかな時間の潮止まりに投げ込んだ第一投にマゴチが食いつき、オレンジ色の円錐0号ウキをひきずり回したこともある。その

されたこのウキメーカーの最大の特徴は、社長が熱狂的な釣り人であること、そして九州や四国の釣り名人が集まっては、それぞれの釣り技術に合わせた改良品をプロデュースするシステムになっていることだ。「高園どんぐり」「敬竿どんぐり」「別作 小里ウキ」「三原ウキ」「立石ウキ深攻め」「大西 円錐」「江頭スルスル」「別作 井内」以上は皆、一言言を持つ釣り名人の名前を冠した商品名なのだから楽しい。ここには個人の技量や差異を呑み込んでしまう会社という化け物の姿はなく、遊びに立ち向かう釣り人の個性が見事に横溢し、ウキという商品になって増殖している。

倍倍ゲームで年商一三億円の企業に成長したこの会社を支えたものが、釣研という梁山泊に集った釣り人たちのそれぞれの情熱であったことがカタログを眺めているだけで読み取れる。そして、今も、それを隠す風でもないのが痛快なのだ。春になったら、もう少し幸せの含有量を増やして釣りをしてみよう。そのために、せっせと釣研のカタログをめくる毎日である。



毛利 甚八 略歴
もうり じんばち

ライター、漫画原作者
1958年長崎県佐世保市生まれ。日大芸術学部卒。
大学卒業後からフリーライターとして「ナンバー」「BE-PAL」「サライ」などでルポやインタビューを手がける。1986年より漫画「家裁の人」の原作をてがける。旅とカメラと歌を愛し、日本の辺境と離島を歩き、過疎や農漁業について思索を続けている。
現在、「月刊OHスーパージャンプ」(集英社)に漫画「地の子(つちのこ)」を、「全国農業新聞」(全国農業会

議所)に「後継者列伝 土を継ぐ」(文と写真)を、「季刊刑事弁護」(現代人文社)に「事件の風土記」(文と写真)を連載中。
単行本に漫画「家裁の人」(全15巻 小学館)、漫画「たちからお」(全4巻 講談社)、ルポルタージュに「宮本常一を歩く」(上・下巻 小学館)、「裁判官のかたち」(現代人文社・2002年3月刊)、CDに「君のために歌をつくった」(自主制作・スタジオ歌亀)などがある。